

# HPV ワクチンの接種を検討しているお子様と保護者の方へ

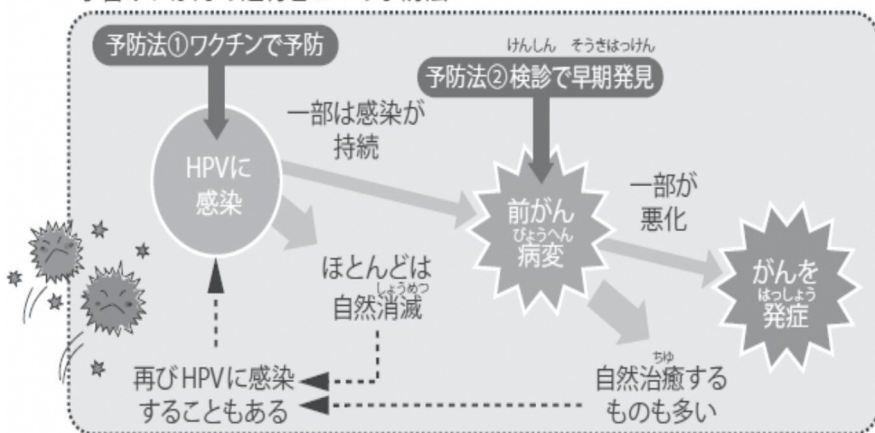
小学6年生になったら HPV ワクチンを定期予防接種として受けることができますが、積極的におすすめすることを一時的にやめています。接種にあたっては、HPV ワクチンの「意義・効果」と「接種後に起こりえる症状」について確認し、検討してください。

## ワクチン接種の意義・効果

子宮けいがんの主な原因ウイルスの感染を防ぎます

我が国では年間約10,000人が子宮けいがんにかかり、それにより約2,700人がなくなれるなど重大な疾患となっています。子宮けいがんの原因は、性的接触によって感染するヒトパピローマウイルス (HPV) です。そのため、ワクチンを接種してウイルスの感染を防ぐことで、子宮けいがんを予防できると考えられています。

### 子宮けいがんの進行と2つの予防法



※HPVワクチンは新しいワクチンのため、子宮けいがんそのものを予防する効果は、現段階ではまだ証明されていません。しかし、HPVの感染や子宮けい部の前がん病変（がんになる一歩手前の状態）を予防する効果は確認されています。子宮けいがんのほとんどは前がん病変を経由して発生することをふまえると、子宮けいがんを予防することが期待されます。海外の疫学調査では、HPV ワクチンの導入により、導入前後で、HPV の感染率や子宮けい部の前がん病変が減少したとの報告があります。

## ワクチン接種後に起こりえる症状

主なものは、接種部位の痛みやはれです。

- HPV ワクチン接種後にみられる主な症状には、接種部位の痛みやはれ、赤みがあります。
- その他、接種部位のかゆみや出血、不快感のほか、疲労感や頭痛、腹痛、筋肉や関節の痛み、じんましん、めまいなども報告されています。

まれですが重い症状が報告されています。

- 呼吸困難、じんましんなどを症状とする重いアレルギー（アナフィラキシー）
- 手足の力が入りにくいなどの症状（ギラン・バレー症候群という末梢神経の病気）
- 頭痛、嘔吐、意識の低下などの症状（急性散在性脳脊髄炎（ADEM）という脳などの神経の病気）

## 副反応疑い報告

接種が原因と証明されていなくても、接種後に起こった健康状態の異常について副反応疑いとして報告された場合は、審議会（ワクチンに関する専門家の会議）において一定期間ごとに、報告された方の概要をもとに頻度等を確認し、安全性に関する定期的な評価を継続して実施しています。

平成29（2017）年8月末までに報告※1された副反応疑いの総報告数は3,130人（10万人あたり92.1人※2）で、うち医師又は企業が重篤と判断した報告数は1,784人（10万人あたり52.5人）です。ただし、接種後短期間で回復した失神等も含んだ数です。

※1 企業報告は販売開始から、医療機関報告は平成22（2010）年11月26日からの報告  
※2 接種スケジュールを勘案し、これまでの1人あたりの平均接種回数を2.7回と仮定して出荷数量より推計した接種者数340万人（サーバリックス®259万人、ガーダシル®81万人）を分母として10万人あたりの頻度を算出

接種については医師とよく相談してください。

## お子様が20歳になったとき

ワクチンを接種したお子様も、20歳になったら2年に1回は必ず子宮けいがん検診を受けてください。

HPVの詳しい情報は、感染症対策課ホームページをご覧ください。



<問合せ> 千葉市保健所感染症対策課  
TEL 043-238-9941  
FAX 043-238-9932